様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２６ 日現在

機関番号：３４４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ１０２７６

研究課題名（和文）がん患者の就労や経済的問題に対する多職種による早期スクリーニングシステムの開発

研究課題名（英文）Development of a multidisciplinary early screening system for employment and financial problems of cancer patients

研究代表者
橋本　理恵子（HASHIMOTO, RIEKO）

大阪医科薬科大学・看護学研究科・非常勤講師

研究者番号：９０７６１１３０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、がん患者の就労や経済的問題に関して多職種で協働してスクリーニングを行い適切なサポートを継続していくシステムを開発することである。がん患者の就労や経済的問題に関する文献レビューに加え、医師、ソーシャルワーカー、がん看護専門看護師が、がん患者の就労や経済的問題に関する支援を行う上で行っている調整についてインタビュー調査を行った。さらに、がん患者の就労や経済的問題に関して多職種で協働する早期スクリーニングシステム（案）を作成した。作成したシステムは、概ね適切であり、臨床適応可能性があることがわかった。今後は、がん患者の意見を踏まえて洗練化させていくことが課題である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
がん患者を診療、支援する医療従事者の実証研究を基盤にがん患者の就労や経済的問題に関して多職種で協働する早期スクリーニングシステム（案）を作成し、概ね適切、臨床適応可能性であるという評価を得ることができた。今後は、チーム医療として就労や経済的問題に関わる支援に取り組むことができるよう、がん患者の意見を踏まえて洗練化させていくことが重要である。これらのことにより、がん患者の社会生活と療養の両立だけでなく、がん患者の生存期間の延長、医療の複雑化は進む昨今におけるがん患者の支援に役立つものと考えられる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to develop a system to collaboratively screen and continue to provide appropriate support to cancer patients with regard to their employment and financial problems in a multidisciplinary setting. In addition to a literature review on employment and financial issues among cancer patients, interviews were conducted with physicians, social workers, and oncology nurse specialists to determine the adjustments they make in providing support for employment and financial issues among cancer patients. In addition, a draft early screening system for multidisciplinary collaboration regarding employment and financial issues for cancer patients was developed. The developed system was found to be generally appropriate and clinically adaptable. Future work is needed to refine the system based on the opinions of cancer patients.

研究分野：がん看護

キーワード：がん患者　就労　経済的問題　スクリーニングシステム

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１。研究開始当初の背景

現在のわが国のがん 5 年相対生存率は 62.1%に達し、がんと診断されてから約 3 人に 2 人が 5 年以上の経過をもっている。働きながらがん治療のために通院しているものは 32.5 万人に上り、長期的な視点での支援が必要である。2012～2016 年度の第二次がん対策推進基本計画では、個別目標として「がん患者の就労を含めた社会的な問題」が盛り込まれた。これは、医療機関が、がん患者の社会的な問題に対する役割を担うことを方向づける画期的な内容であり、医療従事者には、がん患者の就労や経済的問題に関連した社会的側面の支援のあり方が問われていると言える。一般に就労は収入を得るだけでなく、社会とのつながりをもち、自己実現する側面がある。就労しないと経済的基盤がなくなり、貧困や治療困難・中止となるだけでなく、社会的役割を持つことでの自己実現が障害されることになる。このため、がんを告知された患者にとって、職を失うことは社会的苦痛を抱えて生活していくことにつながり、QOL に関連した課題といえる。田中（2012）は、初めて化学療法を受ける就労がん患者にとって、担ってきた社会的役割を遂行していく上での困難として、役割を失う恐れや病気や治療が役割に及ぼす影響のわからなさを抱えていると述べている。山口ら（2013）は、就労患者の約 25-30%が、がん診断後に離職していることを報告し、西田ら（2016）は、離職者の約 40%が、確定診断前後から初回治療開始までの間に離職していると述べている。現状においては、がん告知時、医療者から治療法の提示や治療の有害事象についての情報提供はされているが、就労や経済的問題に関する情報提供などなく、患者は、今後の治療にお金がどのくらいかかるのか、就労をどのように考えたらいいのか分からない状況である。濃沼（2013）は、がん患者の経済的面である自己負担額は、年間平均 92 万円で、がん患者の約 6 割は経済的な困りごとがあることを指摘している。清水（2017）は、がん患者は自らのニーズに気づいていない場合もあり、医療者は、がんやがん治療が患者に与える身体的影響を起点に、個々の患者の社会的な状況を勘案し、その患者の心理や生活にどのような影響を及ぼすかということに想像力を働かせた上で、積極的に患者のニーズを探る姿勢が求められると指摘している。仕事と治療の両立の困難さに直面したがん患者が、問題解決のために第三者に相談したか否かを調査した結果では、調査対象者の約 40%が相談していないと回答しており、医療者側からがん患者へアプローチする必要性が示唆される。本研究により、がん患者が直面する、あるいは、直面する可能性が高い就労や経済的問題に対し多職種連携による早期からのスクリーニングシステムを開発することができれば、がん患者の QOL やスピリチュアル的な医療を継続していく可能性を高められることで意味がある。

しかし、現段階では、就労や経済的問題に関するスクリーニングからサポートまでを考えたシステム開発に向けた調査結果は乏しく学術的基盤となるデータに乏しい状況である。生活の質をいかに高めるかが課題であるがん患者にとって、日常の臨床場面で、患者の情報を早期にキャッチできるのは看護師であり担う役割は大きい。本研究では、診断早期から、社会資源や治療に関わる費用などを含めた情報提供や問題解決を多職種が協働・連携して問題解決を図るサポート体制として、スクリーニングシステムを開発することで、療養環境の整備につながるシステムになり得ると確信している。がん治療の進歩に伴い、がん患者の生存期間は延長し、サバイバーとしてがんと共生しながら社会生活を送ることが多くなってきている。この現状に対して、医療者は、がん患者の生活の QOL の視点だけでなく、高額の医療費で治療が継続できない現状や、労働力の喪失や病院の未収金の増大などの社会の経済的損失も踏まえ、がん患者の治療と社会生活の両側面を多職種協働で支援していくことが求められる。就労支援においては患者教育が大切であると言われているが、今後、がん看護に関わる看護師が、就労や経済的問題に着目して支援体制を構築していくことは喫緊の課題であるといえる。

２。研究の目的

本研究の目的は、がん患者の就労や経済的問題に関して多職種で協働してスクリーニングを行い適切なサポートを継続していくシステムを開発することである。

研究 1）

がん患者の就労に関する研究の動向とともに就労状況における特徴を明らかにし、医療職者の立場からがん患者の就労に対する支援体制の方向性を検討する。

研究 2）

がん診療を行っている医師の視点から、がん患者の就労支援を考える上で意識していることを明らかにする。

研究 3）

治療を受けるがん患者の就労を支援するがん看護専門看護師の実践から、多職種連携における看護の役割について示唆を得る。

研究 4）

治療を受けるがん患者の就労を支援するソーシャルワーカーのマネジメントをもとに看護支援の検討を明らかにすること。

研究 5）

がん患者の就労や経済的問題に関して多職種で協働してスクリーニングを行い適切なサポー

トを継続していくシステムを考案すること。

３．研究の方法

研究１）

文献の検索式：文献は、医学中央雑誌 Web 版（Ver.5）を用いて、「がん」and「就労」、「がん」and「就労支援」、「がん」and「仕事」をキーワードに原著論文に限定し文献検索を行った。

文献の選定基準：がん患者を対象とした就労に関連する文献に限定し、小児がん患者・小児がん経験者を対象とした論文、医療職者が対象である論文、症例報告については除外し、25 論文を分析対象とした。

文献の分析：がん患者の就労状況の特徴を明確にするために、がん治療に伴う就労形態の変化と離職状況、相談先についてまとめ、就労継続要因、就労阻害要因に関連する内容については、がん患者の就労継続を左右する要因として、就労継続、阻害要因に関する記述を抽出し、その意味内容を損なわないようにコード化した。

研究 2）

研究期間：2019 年 11 月～2020 年 7 月であった。

研究対象者：医師 5 名（外科、血液・腫瘍内科）

研究デザイン：質的記述的研究

研究方法：インタビューガイドを用いた半構造的面接。面接内容は、がん患者の就労支援において大切にしていること、工夫していること、注意していることなどであった。

分析：がん患者の就労を支援する上で、目を配ったり意識していることに該当する記述を抽出し、コード化し、類似のコードをまとめてカテゴリー化した。

研究 3）

研究期間:2019 年 6 月～2021 年 2 月。

研究対象者:がん患者の就労に関する支援を実施したことのあるがん看護専門看護師 5 名

研究デザイン：質的記述的研究

研究方法:がん患者の就労支援を行う上で大切にしていることについて半構造化面接法で実施。

分析方法:がん患者の就労支援を行う上での調整について語られている内容を抽出し意味内容の類似性に沿ってカテゴリー化を行った。

研究 4）

研究期間：2019 年 6 月～2021 年 2 月

研究対象者:がん相談支援センター、地域医療連携室などで業務に携わりながらがん患者の就労に関する支援を行っているソーシャルワーカーとした。

研究デザイン：質的記述的研究

研究方法:がん患者の就労支援を行う上で大切にしていることについて半構造化面接法で実施。

分析方法:がん患者の就労支援を行う上での調整について語られている内容を抽出し意味内容の類似性に沿ってカテゴリー化を行った。

研究 5）

研究対象者：がん患者の支援に携わる医療従事者

研究方法：研究 1）～４）の結果をもとに、がん患者の就労や経済的問題に対する多職種連携早期スクリーニングシステム（案）の作成を行う。

適切性と臨床適応可能性の評価：がん患者の診療や支援に携わる医療従事者にスクリーニングシステム（案）の評価を行った。

４．研究成果

研究 1）

がん患者の就労状況の特徴として、がんの診断から治療開始前までの早い時期に離職する傾向にあった。がん患者の就労継続を左右する要因として、【身体調整】【情報獲得】【就労への価値】【支援体制】【職場の配慮】【経済状況】が明らかになった。医療職者は、社会の動向や施策、就労の場で行われている取り組みを理解し、患者の治療と就労の調整役として、就労継続を左右する要因である【身体調整】【情報獲得】【就労への価値】【支援体制】【職場の配慮】【経済状況】の 6 視点を持ち、離職が多い診断時から支援する介入プログラムを構築する必要性が示唆された。

研究 2）

対象は、腫瘍内科医師 3 名、血液内科医師 2 名であった。分析の結果、54 のコード、20 のサブカテゴリ―、7 つのカテゴリーが抽出された。がん患者の就労について目を配ったり意識していることは、「患者に任せあえて踏み込んで介入しない」「知識がなく踏み込めない」「患者の退職の決断を意識する」「仕事と治療、社会生活が成り立つよう支援する」「患者の価値を大切にする」「多職種と役割分担をする」「多職種と協働・連携して対応する」であった。医師は、専門職

としての役割である治療を中心に、治療を行っていくために就労の継続ができるよう「仕事と治療、社会生活が成り立つよう支援する」ことを意識して関わっていることが明らかとなった。看護師は、患者の生活を捉え、医師のスタンスを理解したうえで、患者の就労に関して情報を把握し、患者の意向を代弁したり、コーディネーターとして多職種と患者を取り囲む支援ができるよう働きかけることが求められる。詳しい制度に関しては、多職種の介入を提案することも必要であり、多職種と連携・協働した支援が望ましいといえる。

研究 3）

研究対象者は、５名のがん看護専門看護師であった。がん看護専門看護師が実践している調整として【仕事の価値や生き方を理解したうえで患者にとっての就労のありようを支える】【医師や看護師が就労や経済的問題に気づいたり対応できるよう現場に働きかける】【院内外の専門職と連携し社会資源や病院の制度を活用しながら生活や治療の維持を目指す】【患者が自分の人生として仕事と治療を考えていけるよう働きかける】【がん診断の衝撃の中で治療と仕事について後悔しない決定となるようエンパワーする】【病態変化や治療の見通しを基盤に患者の状況をアセスメントし就労や生活の支援を考える】という６カテゴリ―が抽出された。がん看護専門看護師は、多職種を巻き込みながら、柔軟にがん患者の就労や経済的問題の対応できるよう働きかけを行っていることが明らかになった。今後、医療チームとして治療を受けるがん患者の生活の中にある就労や経済的問題に対応できるシステム構築が求められる。

研究 4）

研究対象者は、8 名のソーシャルワーカーであった。がん患者が支援しているソーシャルワーカーが、がん患者の就労を支援する上での調整は【患者自身が自分を守りながら問題と向き合えるよう後押しする】【社会制度を駆使して生活や治療の継続をめざす】【多職種から引き出した専門的知識や意向を踏まえ患者の生活を整える】などであった。がん診療を行っている医師とソーシャルワーカーの調整から、看護師は、治療を受ける患者の生活の調整ができるよう、医師とソーシャルワーカーの間を調整する役割が求められる。今後、医療チームとして、治療を受けるがん患者の就労や生活を整えるための細やかな連携ができるシステムを考案していく必要性が示唆された。

研究 5）

作成したがん患者の就労や経済的問題に関して多職種で協働する早期スクリーニングシステム（案）は、概ね適切であり、臨床適応可能性があることがわかった。今後は、チーム医療として就労や経済的問題に関わる支援に取り組むことができるよう、がん患者の意見を踏まえて洗練化させていくことが課題である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 橋本 理恵子，今井 芳枝	４．巻 17 巻1号
２．論文標題 がん患者の就労状況に関する文献検討	５．発行年 2019年
３．雑誌名 The Journal of Nursing Investigation	６．最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32273/jni.1-9	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 橋本理恵子、今井芳枝、青木早苗、鈴木志津枝
２．発表標題 がん診療をしている医師が行っている患者の就労について目を配ったり意識していること
３．学会等名 第35回日本がん看護学会学術集会
４．発表年 2020年

１．発表者名 橋本理恵子、今井芳枝、青木早苗、鈴木志津枝
２．発表標題 がん患者の就労に関する文献検討
３．学会等名 第34回日本がん看護学会学術集会
４．発表年 2019年～2020年

１．発表者名 Rieko Hashimoto,Yoshie Imai
２．発表標題 Management Conducted by Doctors and Social Workers to Support the Employment of Cancer Patients Undergoing Treatment.
３．学会等名 The 7th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science (7th WANS)（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Rieko Hashimoto,Yoshie Imai
２．発表標題 Adjustments Made by Nurses to Support The Employment of Cancer Patients Receiving Treatment
３．学会等名 The 7th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science (7th WANS)（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 橋本理恵子、今井芳枝
２．発表標題 治療を受けるがん患者の就労支援を行う上で　ソーシャルワーカーがおさえていること
３．学会等名 第27回日本緩和医療学会学術集会
４．発表年 2022年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	鈴木　志津枝 (Suzuki Sizue) (00149709)	兵庫医療大学・看護学部・教授 (34533)	研究計画の助言、研究全体の助言、ならびに、研究結果の分析、校閲。
研究分担者	今井　芳枝 (Imai Yoshie) (10423419)	徳島大学・大学院医歯薬学研究部（医学域）・准教授 (16101)	研究計画の助言、研究全体の助言、研究結果の分析、論文作成、校閲。
研究分担者	青木　早苗 (Aoki Sanae) (40516168)	関西医科大学・看護学部・准教授 (34417)	学会発表の抄録確認

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	寺町　芳子 (Teramachi Yoshie) (70315323)	大分大学・医学部・教授 (17501)	研究計画の助言

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関